
ソードアートオンライン 始まりの大地

角材さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアートオンライン 始まりの大地

【Nコード】

N1477Y

【作者名】

角材さん

【あらすじ】

初めての仮想世界にログインした少年「ソラ」

彼がログインしたのはネットゲームの間ではかなり有名になっていた「ソードアートオンライン」

魔法の要素を完全に廃止し、そのかわりに「ソードスキル」という名の必殺技を取り入れている。使える武器は近接武器だけ。つまり信じられるのは自分の剣技のみ。

そんな自分が英雄になれるような夢の世界を壊す出来事が起きた。

ソードアートオンラインを作ったプログラマー、茅場が言ったこと。

「この世界での死は現実世界での死。」

デスゲームの始まりだった。

少年は何を思い、何をするのか。

プロローグ 全ての始まり（前書き）

ども、角材さんです（○、○）

よく友達に「状況説明ヘタだなm9（＊、＊）プギヤー」と言われる角材さんですが頑張つてソードアートオンラインのSSを書いています！

本編ソードアートオンラインを読んでないと分かりにくいかもしれ
ません（´Д、`）

そこんとはすいませんm () m

それでは「プロローグ 全ての始まり」をどうぞ！

プロローグ 全ての始まり

「これはゲームであつても遊びではない。」

この言葉が千人の戦士たちを仮想の現実^{プレイヤー}に魂を閉じ込めた。

茅場のチュートリアルが終わり、俺は今まで手に持っていた曲刀を背中のホルダーに納め、人々が騒いでいる広場から少し離れた壁に背中を預け、覚悟を決めた。

「このゲーム内での死は、現実世界の死と同じ、か」

このゲームで生き抜く為にはレベルを上げるしかない。モンスターやアイテムなどはそのうちプレイヤー達の奪い合いを始めるだろう。それまでに出来る限りレベルを上げないと危ない。

βテストでもないからソードアートオンラインのこともあまり知らない。

でもそれでも俺は、この世界に立ち向かい、抗い続けることを決めた。

まずやらなくてはいけないことは、死なない為にレベルを上げること。ただどレベルを上げるためにはモンスターがたくさん倒さなくてはいけない。そのためには今、持っている金で出来る限り強い装備を買うべきなのだろう。でも買うにもお金がまだあまり無い。

なら弱いモンスターを倒して少しずつ金を貯めるしかない。でも、恐らく「始まりの街」の周りのモンスターはもうすぐ狩りつくされるだろう。それなら多少危険度が増すが違う街へ移動したほうが良いはずだ。

「よしッ！……！」

そう決めた俺は壁から立ち上がり、地図に見えるまだどこかに繋がっているかもわからない未開拓の地に向けて、歩き出した。

「絶対　生きて帰るんだ　」

空を見上げると一つの流れ星の流れた。

プロローグ 全ての始まり（後書き）

またまた角材さんです（o・d・）
短いですね、はい。

3個くらいにプロローグを分けるんで全部読んでくれたらうれしいです！

では（^o^）

ブログ 出会い（前書き）

どうも。角材さんです（＊、、）

連投する予定だったんですがちょっとリアルが忙しくてすぐに投稿できませんでした（、・ω・、）

一応、チマチマ更新していきますがこれともうひとつ、この小説に
少しか関係するソードアートオンライン系列の小説を投稿する予
定ですm（――）m

そちらは完全にソードアートオンラインを読んでないとわからない
ネタバレ全開な小説になっています（・・）

え、そんな暇があるなら早く更新しろって？

（。・ω・。）

そ、それではどうぞ（＊・ω・）ノ

プロローグ 出会い

最悪のデスゲームが始まって二週間が経った。人間というものは案外すごく、こんな恐ろしい状況にも適応を始めていた。そんなこと言ってる俺もこの状況を少しずつ受け入れ始めていた。

俺は第一層にある人があまりいない村の一つに留まり、ひたすらレベル上げに勤しんでいた。おそらく平均的なプレイヤーのレベルよりは高くなっていると思う。

いつものように近くの森に入り、ポップし続けるモンスターを狩り続けていた。モンスターがポップ出来る限界を越えて、モンスターが出なくなっただので一度、宿に戻ることにした。

森を抜け、草原を歩いているとき誰かの声が聞こえた気がした。

「ん？」

辺りを見渡す。辺りはポリゴンで出来ているとは思えないほどの草が風に吹かれているだけだった。

「気のせいかな？」

そして歩き出そうとした時、今度は確かに聞こえた。

「きゃああああー!!」

「!!」

その悲鳴が聞こえた瞬間、俺は走り出した。近くで誰かが危ない状況に合っている。こちら辺のモンスターは村にいる数人のプレイヤーで倒したからもういないはず。ということはこの状況を作ったのは、人間。

俺は宿の裏の茂みに駆け込んだ。すると俺が視認出来るギリギリの所にひとりの少女と一人の男性がいた。少女は木にもたれ掛かっている。どうにか声が聞こえた。

「な、なんでこんなことするんですか!？」

「このゲームから現実世界に帰れる保証なんてどこにもねえ!ならこの世界で満足するしかねえだろ!―それにこの世界で犯した罪はどうせ向こうではなんともないはずだしな!当たり前だろ?だってここは、『ゲームの中』なんだからなあ?」

そう言うと男は汚い笑いを浮かべながら少女に近づいた。そんな恐怖に耐えきれなかったのか、少女は涙を流しながら叫んだ。

「きゃあああああ!―!」

(間に合え!)

全速力で走った。男の薄汚い手が彼女に触れる直前、横から音がすることに気づいたようで男は俺のことを見た。

「あん? 誰だ、おま」

「黙れ、腐れ外道!」

俺はレベルをそこそこ上げ、ステータスアップポイントの約半分以上を『筋力』に注ぎ込まれた俺の全速力、全力の拳を見事なまでのクリーンヒットで顔面に受けた悪漢はそのまま吹っ飛び木に頭から当たった。

そして相手から気絶のアイコンが発生したことを確認し、少女の近くに駆け寄る。木に腰を掛けるようにして座っている茶髪のポニーテール?の少女は何が起きたか分からないようだった。一応、出来る限り優しい笑顔で少女の近くに屈んで、視線を合わせて話した。

「大丈夫かい?」

「え あ、はい」

少女は一度合った目を逸らし、不信任を抱いた眼差しで見えてきた。

「なんで 助けたんですか？」

「は？」

「もしかしたらあのままあの人にPKされたかもしれないじゃないですか！？」

PK？何のことだ？ネット用語かなんか？

「まあ、PKってのが何かは知らないけど 君、泣いてたじゃん。

」

「え？」

「泣いてる人をほつといて、逃げるほど最低な人間じゃないよ。」

」

彼女は俺の言ったことに驚いている、らしい。さらっとカッコつけたこと言ってしまったが、嘘を言っではない。だが恥ずかしいことを言ってしまったのは事実なので、彼女から顔を背けてしまう。だが恐らく今の俺の顔は、ソードアートオンラインの高画質アバターとして感情表現の表示の限界くらい顔を真っ赤にしているだろう。そんな顔を見られなくて顔を逸らしたのだが

「ハハ、ハハハハハ！！！」

「な！わ、笑うなよ！」

「ハハハハ！い、いや この世界来て、こんな人間味のある人にあまり会わなかったんで」

「 そうなの？」

「はい！このゲームは私たちの第二の現実であって、でも所詮ゲームですから。 HPが無くなったら死んじやうわけですし」

」

そうか このゲームは俺達プレイヤーにとっては『第二の現実世界』であって、でもどこまで行っても『ゲーム』なんだ。しかもただのゲームじゃない、デスゲームだ。

精神的におかしくなって、人に危害を加える奴らだってこれからたくさん出てくるだろう。それならなおさら他人なんかに構ってられない、自分を守らなくちゃいけない。そう考えるなら俺のといった行動はおかしいだろう。

「とりあえず立てる？」

一応、手を差し出す。少女は差し出した俺の手をまじまじと見つめ、何故か顔を真っ赤にして俺の手をオズオズと握ってきた。それを引き、彼女を立ち上げさせる。

「あ、ありがとうございます。」

「いやいや」

二人してペコペコする。すると少女が思い出したように話し出した。

「あ、助けてもらったのに名前まだ言ってませんでした！私、ナギって言います。よ、よろしく願いしまふ！ / / /」

緊張していたのか最後の最後で噛んでしまい、ナギは顔を赤くしてうつむいてしまった。

「ハハハハハ！俺の名前はソラ。すぐそこの村に留まってる。よろしくね。」

「は、はい！！よろしくお願いします、ソラさん！」

自己紹介を終え、ナギがとりあえず宿に移動しようと提案してき
たが俺は一つの事を思い出した。

「こいつどうする？」

俺が指を指したのは先ほどナギを襲った男だった。未だに気絶し
ていてピクリとも動かない。このまま犯罪者を送還する『牢獄』に
連れて行くつもりでいたのだが

「もういいですよ。結局、ソラさんのおかげで何もされませんでし
たし。」

「しょうがない。」

ソードアートオンラインでは気絶状態で攻撃を受けると気絶状態
を解除する事が出来るので、倒れている男のもとに行き、男の体を
蹴っ飛ばす。

「う、うう　ハッ！」

「よう、起きたか、犯罪者さんよ」

「ひ、ひい！」

「お前が襲った女の子がお前のことを見逃してくれるって言うてる。
だからさっさとどっか行け！もう変なことすんなよ？」

「ひ、ひいー！」

起きるや否や逃げていく男。その男をとりあえず見送りナギのほ
うへ戻る。

「よし、じゃあ宿行こうか。」

「はい！」

ブログ 出会い（後書き）

え？いつまでブログやってんだって？

つ、次でブログを終わりにしますのてゝ。んゝ！

許してくださいm(_____)m

ではゝ(^o^)

ブログ 別れと旅立ち

ソラさんと宿に移動して、NPCレストランでご飯を食べていた。私はパンとスープ、ソラさんはスパゲッティ。「みたいなもの」を食べていた。

「あ、おいしいですね!」

「だろ?ここに留まってるのはこの料理のおかげでもあるんだ。」

ソラさんはとっても美味しそうな顔でご飯を食べている。見ているこっちが幸せになれるような笑顔だ。私も自然と笑顔になれていた。

「ごちそうさまでした。」

「ごちそうさまー。いやーうまかった!満足満足♪」

「ご飯を食べ終わった私達はレストランでお茶を飲みながら、自分達の話をしていた。

「へー、ソラさんってソロプレイヤーだったんですか?」

「まあね、一緒にやってくれる友達もないしね。でもナギもソロだろ?」

「まあ、はい 周りが男の人ばかりで怖くて それに女の人はいなかなか見かけないですし。」

「まあ、そりゃそうだよな。」

こんなゲームにログインする物好きな女性のゲーマーはあまりいない。一応、何人かには会って名前は聞いたけど、多分あまり会っ

機会はない気がする。

するとソラさんが何かを思い出したように聞いてきた。

「あ、そういえばさ。さっき言ってたPKってのはなんなんだ？」

そういえばさっき、ソラさんはあまりオンラインゲームとかはやっていなくてネット用語とか全く知らない、と言っていたことを思い出す。

「ああ、それは、PK、すなわちプレイヤーを殺す行為のことです。

」

「プレイヤーを殺す？プレイヤーが？」

「はい。」

ソラさんは腕を組み、理解出来ない、と言った顔で言葉を繋げた。

「なんで？」

「いや 私に聞かれても 」

それもそっか、と言ってさっき注文したコーヒー？的な何か（私は紅茶的なもの）を飲む。すべて飲み干して私達は黙りこくってしまっ。

（な、何か話題を探さないと ）

私が話題を探していると。

「さて 」

飲み干したカップをタップして消して、ソラさんは席から立ち上

がった。そして左手の人差し指と中指だけを立て、下に振り下ろす。すると鈴のような音が鳴って、システム画面が現れる。それを慣れた手付きで操作する。

「よし、回復アイテムも結晶もあるか。」

「え？また森に行くんですか？」

「ううん。言っただけだったけど、俺、この村から出て行くよ。」

驚きのあまり立ち上がって、ソラさんに駆け寄る。その姿に驚いたのかソラさんの顔が驚きに包まれる。

「な、なんですか！？」

「え、えーと　一昨日、ここに来たプレイヤーが、もう最前線が第二層の迷宮区まで行ってる、って言ってたから。一応、今のプレイヤーの平均的なレベルより高い自信があるからさ。第二層に拠点を移そうと思ってさ。」

「そ、そうですか。」

つまり、ここでソラさんとはお別れになってしまうということ。初めてこの世界で出来たお友達とお別れ。ソラさんから離れ、下を向く。

「じゃあ　俺、行くわ！またどこかで会えたら気軽に話し掛けてな。」

手を振り、ソラさんがレストランから出て行く。私は　ただただ立ち尽くしていた。

「さて、一回、始まりの街に戻らなきゃな」

ナギにお別れをして、モンスターの出なくなった森を歩く。

第二層ということはここにいるモンスターより強い。そんな簡単に死ぬことはないだろうが念には念を押した方がいい。自分の所持金を確認する。無駄にモンスターを狩ったおかげでたくさん金がある。

「しょうがない、新しい防具買うかな。」

暗くなるまでにはまだ時間があるのでゆっくり歩くことにする。歩き始めてから十分くらいが経った頃、後ろの茂みから何かが走ってくる音が聞こえた。もうモンスターがポップする時間になったのか？

「っ！」

すぐに背中に刺しておいた曲刀を抜き、いつ攻撃が来ても大丈夫なように身構える。そしてそこに現れたのは

「ど、どうも」

「な、ナギ!？」

茂みから出てきたのは二十分近く前に別れた少女ナギだった。ずっと走ってきたのか息切れしていた。とりあえずそこら辺の木に腰掛けさせて、ナギの呼吸が整うのを待った。

「す、すみませんでした。もう大丈夫です。」
「ん、そっか。で　なんでナギがここにいるんだ？」

するとナギはばつが悪そうに下を向いてしまった。俺はナギが自ら話し出すのを待った。

「よ、良かったらなんですけど　」
「ん？」

ようやく話始めたと思ったら、声がかなり小さく耳を澄ませないと聞こえない程の音量だった。

「　　て　さい」
「え、なんて？」

声が小さくてあまり聞こえなかったので近づいた。するとナギは今まででは考えられなかったほどの声で言った。

「わ、私と！！！こ、コンピを　組んでください！！！！」
「　　は？」

このゲーム、いやこのゲーム以外のMMORPGでも基本的に『ハラスメント防止コード』というのがある。それは異性のプレイヤーが自分にやたらと近づいたり、無闇に触るという行為をされることを防ぐコードである。そのコードに該当したプレイヤーは処罰を

受ける。ソードアートオンラインでは、始まりの街の地下にある牢獄へ送還されるようになっていた。

そんなことがあったりするので女性プレイヤーと男性プレイヤーが一緒に行動するということはあまり見かけないのだ。

「
」

「え、あ、いや
」

ナギは俺の沈黙を否定と受け取ったらしい。本当はただ脳内回路がショートして言葉を話すことができないだけなのだが、少しずつ頭が理解を始めたので言葉がでるようになってきた。

「え、えと 俺、で、いいの？」

「は、はい！むしろお願いします！」

「でも、ナギって 男、怖いって
」

「なんでかわからないんですけど ソラさんは怖くないんです
むしろ、安心する？って感じがします
」

「そ、そか
」

木々の葉音や風の音でうるさかったはずの森が今ではやたらと静かだと感じた。俺たちは二人して黙りこくってしまう。

その沈黙を破ったのはナギだった。何かを思い出したかのように急に左手を振り下ろした。

「あ、あれれ？」

恐らくシステム画面を出そうとしているのだが、焦っていてちゃんと出ないようだ。

数回挑戦し、やっと成功してたどたどしい手付きで何かをいじっていた。

すると突然、俺の頭の中に鈴のような音が鳴った。これはシステムからメールが来た時になるもののはずだ。システム画面を開き、メール画面を確認すると一件だけ未読のメールがあった。それをタップし確認する。

『プレイヤー名 ナギさんからフレンド登録の希望が来ました。これを承認する場合は『YES』を。拒否する場合は『NO』を押してください。また拒否しても相手に伝えられません。』

YES

NO

『

メールはナギからのフレンド登録要請だった。恥ずかしがっていて話せない俺の為に送ってくれたのだろう。

そのメールを見て、俺は少し迷いながらも『YES』を押した。その瞬間、俺とナギの間に一つの画面が表示された。

『プレイヤー名 ソラさんが プレイヤー名 ナギさんのフレンド登録要請を承認しました。』

「 よ、よろしくな、ナギ。」

「 は、はい！ふ、ふつつか者ですが よ、よろしくお願い致しますふ！」

こうして二人のソロプレイヤーは晴れてコンビになった。

そして長い時間が経った。

あの全ての始まりの日から約二年。

一万人以上プレイヤー達は六千人にまで減っていた。

そして、最前線は現在、七四層まで到達していた。最終層までは後、二六層。

第一章 仲良きことは美しきかな（前書き）

ども、お久しぶりです。角材さんでございます。

最近、部活が忙しくて

2日後には部活の県大会にでなきゃ行けませんし
つまり、あんまり更新がうまく行かないのです（、A、）

さてさて

ようやく本編に入りました。

少しキャッキャウフフな展開にしたいなあ

第一章 仲良きことは美しきかな

あの始まりの日から二年が経った。俺とナギはペアで動き、着実にレベルを上げていった。そのうち、俺達は、ある少女に言われて『攻略組』に参加する事になった。

ソードアートオンラインの舞台、アインクラッドは一層ごとにフロアボスモンスターという次の層に移動する際に絶対に倒さなければならぬモンスターがいる。そのモンスターはかなり強い。なのでそれを倒し、ソードアートオンラインを攻略する強者達を総称して『攻略組』と呼ばれた。

だが俺達はあまり攻略をする気はなく、死なないようにレベルを上げていただけなのであまり率先して参加はせず、要請された時のみ参加していた。

「ふう

」

真つ暗な洞窟の中でようやくモンスターの群れを倒し終えた俺は、腰に掛けている鞘に刀を戻した。

何故、洞窟なんかにいるかということこの洞窟に経験値がたくさ

ん拾えて、なおかつ俺の欲しがっていたアイテムをポップすることが出来るモンスターがいるという噂を聞きつけたからである。あくまで噂であって信憑性が薄い話だったが、モンスターのレベルを聞くと、今の俺達ならほとんど倒されることはないレベルだった。だから油断していたのかもしれない。実はこのモンスターにはまだ見つからない習性があったのだ。

「『体力が一定値減ると仲間を呼び、群れになって襲ってくる』か。やっかいな習性だね。」

このレベルにしては攻撃力高いし、行動パターンも多いから初見で倒せなくても仕方がない。俺も少しヒヤッとしたのが現状。ま、無事全体倒せたので良しとしよう。

ゲットしたアイテムの中に目当てのアイテムがあったので、ナギに話しかけようとしたら。

「あれ　　ナギー？」

いなくなっていた。戦闘が始まる直前には確かにいたのだが。

「ナギー、でておいでー」

何故心配しないかと言うと、さっきも言った通り、ナギはこの程度のモンスターにやられる程、弱くはないからだ。伊達に攻略組の一人ではない。ここら辺のモンスター達ならナギ一人でも一掃出来るだろう。

仕方なくここまで来た道のりを戻ることにした。よく聞き耳を立てていると

【　　キヤー　　】

遠くからナギの悲鳴が聞こえた。少し、不安になり小走りで声が出た方向に向かった。

そして戦闘音を探し、ようやく見つけた場所には。

「キヤーーーー！！！！」

ナギがいた、半泣き状態で、叫びながら。中を見てみると、この層より更に下層にいるザコモンスターが数体いた。そのモンスターはやたらとウネウネヌルヌルしていてナマコのような形をしていて気持ち悪いと評判のやつだ。

そのモンスターがナギを狙っていた。ウネウネした肢体が少しずつ近づいてくる光景は言葉では形容し難いものがある。

「こ、こつち来んなー！！！！」

ナギが珍しく、ですます口調じゃないということはかなり動揺しているのだろう。

「ち、近づくなーーーー！！！！」

次の瞬間、ナギが持っているダガーが真っ赤に光り出す。ソードスキルを放とうとしているらしい。しかもあの構え、あの光からするに、確かかなり攻撃特化型のスキルだ。

『ダガー用ソードスキル「ヴォルスクライム」。

ダガーのソードスキルには珍しく、広範囲に六連続で斬りつける技。一発一発が高い攻撃力をもっている。最後に突きを放つのだがその一撃はシステムアシストにより、使用者の力の限界を越える一撃なので発動後の硬直時間が長い。』

普通はこの程度のモンスター達に使う技ではないのだが。そこま
で怖いのだろうか？

「 は、ハア！」

ソードスキルを放ち、ダガーの刃先がモンスターを捉えようとし
た瞬間、見事に避けられた。しかも六発全て。動揺し過ぎて、狙い
がうまく定まらなかったのだろうか。

そしてソードスキルを発動した後には必ず硬直時間が出来てしま
う。それを見て、待ってましたと言わんばかりにモンスターが攻撃
体勢になる。

（あ、このモンスターの攻撃方法って 確かヌルヌルした体液だ
った気が ）

気づいたときにはもう遅かった。口から放たれたヌルヌルした体
液がナギに当たる。当然、ナギの体力は少し減る。それを呆然とし
た表情で見つめるナギ。悲鳴でもあげると思ったのだが全く微動だ
にしない。すると数秒後、悪魔のような声が聞こえた。

「ふ、フッフ アハハハ」
「な、ナギ ？」

何故か笑い声が聞こえてきた。しかもソードアートオンライン内
ではあり得るはずのない黒いオーラのようなものが見える、気がす
る。

ナギのただならぬ雰囲気を感じたのかモンスター達が少しナ
ギから離れて行く。

「逃がしませんよ」

システム画面を開こうとするナギ。しかもここから見える限りあれは、スキル設定の欄？

「　　つて、おい！」

壁に隠れていた俺は飛び出てナギに向かって走りだす。

「な、ナギ！」

「え？」

ナギがこちらに気づいた。すると動きが止まり（ついでに悪魔のオーラも消えた。）、ぺたんとその場に座り込んでしまった。

「こいつらは俺が始末するから、休んでろ。」

「　　は、はい」

モンスターに向かって走り出す。悪いけど速攻で終わらせなきゃな。

鞘に納まっている刀に手をかける。右手は鞘に、左手は柄に。これがソードスキルの構え。そして刀が藍色に輝く。モンスター共が刀の攻撃範囲内に入った瞬間、高速で刀を抜く。

『ソードスキル「五月雨」。刀のソードスキルで、鞘に納めた状態から高速で引き抜き、横一閃に斬りつけ、その後手首を返し、もう一度横に斬りつけ、最後に縦切りをする。』

普通なら止まって行こうスキルだが、ソードスキルのシステムアシストは上半身のみなので下半身は自分の力で動ける。なので上半身で自動的に攻撃しながら、下半身を自力で動かす。脳を二つに分けた奇妙な感覚になるが、もう慣れた。

（だけどこれをやると頭がやたら熱くなるんだよね）

数秒で数体を斬り伏せた俺は刀を鞘に戻し、ナギの元に戻った。ナギはさっきと同じように地べたに座っていた。ナギの前で足を屈め、目線を合わせて話しかける。

「大丈夫か？」

「ソラさん　えいつ！」

「いてっ。」

叩かれた。ナギを見てみると頬を大きく膨らませて怒っていた。

「な、何かな？」

「私が、あいつ嫌いなもの知ってましたよね？」

「いやー」

そうなのだ。過去に、初めてあのモンスターと対峙した時に今と同じように叫びながら戦っていて、戦い終わったあとに「こいつともう戦いたくないです」と泣きそうになりながら言っていたのだ。モンスターの形も攻撃方法も生理的に無理らしい。

「分かってて隠れましたよね！？」

「いや　だって　ねえ？」

気持ち悪いではありませんか。それ以外に理由なんてありませんよ。

「何ですか？言い訳なら聞いてあげますよ？」

「なんでもないです。」

とつてもくだらないこと&ナギが聞いたら本気で襲ってきそうなので言わないでおくことにした。

「あ、そういえばソラさん、目当てのアイテム手に入ったんですか？」

「あ、うん。群れを倒したからいっぱいアイテム取れたよ。」

「そうですか。なら家に帰りましょうか。」

足にある小さなホルダーにダガーを戻し、歩き出そうとするナギだが

「あ、れ？」

「おっと！」

歩き出そうとしたらナギが足をもつらせて急に倒れた。隣にいたおかげでどうにか支えられたが、これは俺がナギを抱きしめる形になっている。

「じ、ごめん！」

離れようとすると、ナギが強く抱きしめてきた。俺の目の前にハラスメント防止コードがでて、警告音が鳴り響いている。

「なななナギ！？ど、どうした？」

「離れないでください！」

急に抱きしめられ、動揺してしまう。こ、これは　まさか、俺にも春が来たのか！？

だが次に発せられた言葉で俺の動揺は少し収まるのだった。

「さっきのやつ、攻撃に 麻痺効果があったみたいで 下半
身が麻痺して、動かないんです / / /」
「そ、そうか」

思春期の少年的にはこんな状況で動揺しない人はいないと思う。
でもまあ、嬉しくないわけはないのだが。でもいつまでもこの状況
は非常にまずい。なので

「 ごめん、ナギ！」
「 え、うわ!？」

何をしたのかと言うと、お姫様だっこをした。はずかしいが相手
が動けないならしょうがない、そう、しょうがないのだ。これは相
手を助ける為の行為だ。

「 は、離してください！」
「 大丈夫だつて、動けないならしょうがないだろ？それにずっとこ
のままってわけにも行かないだろ？」
「 そ、それはそうですね」
「 ならつべこべ言わないの。 恥ずかしいのはお前だけじゃない
んだから」
「 / / /」

二人の間に微妙な雰囲気 flowed.

第一章 仲良きことは美しきかな（後書き）

キヤツキヤウフフな展開にしたいなあ

では／＼（＾o＾）

第一章 仲良きことは美しきかな 2（前書き）

お久しぶりです。
角材さんです。

心の中で

「一週間に一回更新してやるぜ！」

とか言っていたのに気がつくともうそろそろ二週間経ちそうになっ
ていました（。D）

とりあえずどぞ。

第一章 仲良きことは美しきかな 2

「どっか座れるとこないかな」

ソラさんは私の腰掛ける所を探しているらしい。でもそんなことより私は恥ずかしいので早く下ろしてほしい。でも昔からお姫様だっこされるのって夢だったからこのままでいてくれたら嬉しいなあ。

（って私、何を考えてるの!?!）

頭を振り、変な考えを放り出す。

「ど、どうした?」

「い、いえ! なんでもないでふ!」

早く降りたいのにまだ脚が動かない。なんでこんな時に限って、解毒結晶ないのかな。

「よし、ここで大丈夫かな。ナギ、降ろすぞ?」

「は、はい。」

人が二人くらい座れる岩があったのでそこに降ろしてもらった。上半身は少し動くので少し体勢を整えた。するとソラさんが私の隣に座った。

「脚、どうだ?」

「すいません、まだ動かないです」

「ん、そつか。別にかまわんよ、ギルドに所属してるわけでもないから遅くなっても困らないからな。」

そういつてソラさんは腰に付けていた刀を外して岩に置いた。普通、ソードアートオンラインではモンスターがいるフィールド上で武装解除をするなんて自殺行為なのだが、この洞窟のモンスター達はほとんど狩ったのでそんな心配はないはず。

「そろそろ麻痺切れるはずなんですが」

その時、足から違和感がスツと消えた。HPバーの下を見してみると、そこには先ほどまであった麻痺アイコンが消えていた。

「やっと麻痺効果消えましたー！」

「お、消えたか。」

「ご迷惑をお掛け致しました。」

「気にすんなって！」

ソラさんは先ほど置いたばかりの愛刀を持ち、刀のホルダーを腰にセットして出発の準備を整えていた。

「じゃあ、行くか！」

「はい！」

あれから俺達は洞窟を抜けて、自分達の泊まっている宿のある26層に戻った。基本的に俺はおいしいNPCレストランが近くにある宿に定住することになっている。そしてここ26層には俺の心を驚

掴みにしたNPCレストランがあった。ここの近くの宿に泊まろうとしたら、近くに安め（安いと言っても膨大な額）のバンガロー的な物が販売していたので、そこを買って住むことにした。同じ頃にナギは23層に小さな家を買っていた。そこが景色がいい場所なのに安い（何度も言うが安いと言っても膨大な額）ので速攻、買うことを決めたらいい。

いつもフィールドにいるわけではないので、俺達は戦闘をしていないとき大概どちらかの家にいたりする、暇だからね。

真つ暗な洞窟から抜けた時にさりげなく時計を見てみたら確か午後の一時半過ぎだった。確かに気がつくとお腹が減っていた。なので宿に戻る前に行き着けのNPCレストランに行くことにした。

そのNPCレストランというのは26層の転移門から歩いて数分と近い場所にある。剥き出しの土をほんの少し舗装した程度の道をナギと歩く。周りからはたくさんの露店から威勢のいい声がたくさん聞こえる。その中にはNPCの他に、プレイヤーが自分で店を開いている場合もあるのでそこには挨拶くらいはするようにしている。

「お、ソラじゃん！」

「よ、アフアームド。商売はどうだ？」

「んー、ボチボチかな。こちら辺もプレイヤーの店増えてきたからやりにくくてさー。あ、ナギちゃん！このお肉安いけど買わない！？」

「ま、まだこの前アフアームドさんから買ったお肉があるので大丈夫です。」

などと会話をしながら歩き、目的の場所についた。青色ののれんをくぐり中に入る。中は人が二十人くらい入れるくらい大きい。壁際の端が俺達の定位置。椅子に座り、そこら辺を歩いていたNPC

に注文をする。待つこと数分。料理が運ばれてきた。俺の前に出されたものは、外見はただのハンバーガー、味はたまごサンド的ななにか。これがとてもおいしくよく食べている。のれんなのにハンバーガーって。最初はそう思ったが、考えた方の負けなのだろう。するとナギの注文した料理が運ばれてきた。とても香ばしいチーズのような香りがする。

「いつものじゃないのか？」

「あ、はい。おいしいって噂になってたんで頼んでみました！」

それはスパゲッティのようなものだった。ナギはスプーンとフォークを持ち、ニコニコしながら皿を見ている。やっと注文が揃ったので、

「いただきます。」

「いただきます！」

ハンバーガーにかぶりつく。何度食べても飽きないこの味ってすごいよな。でもたまには違うものも食べたいな。あ、米系のものも食べたいな。

などどうでもいいことを考えているとナギが何かを思い出したかのように話しかけてきた。

「そういえば、なんであのアイテムを取りに行ってたんですか？」
「？」

ハンバーガーにかぶりつくこうとしている面白い格好で固まってしまった。初めはナギが何のことを言ってるかわからなかった。だがよく考えればそれは先ほどのモンスターのことだとわかった。

「ん、今俺が使ってる刀が『白銀 終ノ型』しろがね しゅうのかた っていうんだけど。この白銀の耐久値が多分だけど、そろそろ限界を迎えると思うんだ。」

このゲームの武器には耐久値が存在し、耐久値を越える攻撃を受けると武器自体が壊れて無くなってしまう。しかも俺は刀使いなので、刀は一振りしか持たない。なのでフィールドで刀が無くなったらどうしようもない。

「で、新しく買い換えるのも良いと思っただけで昔から大事に育ててきた相棒だから、どうにも捨てられなくてさー」

この白銀は、俺がソードアートオンラインにログインしてすぐに使い始めた刀をひたすら成長させ続けた結果だ。何度も死にそうになった時にも共に戦った相棒なので、たくさん思い入れもある。そんな簡単に捨てることもできない。

「でも聞いた噂によるとこの刀、まだ進化するらしいんだよ。それでその精製に必要なのがあのアイテムなんだ。」

あくまで噂なのでわからないが、方法があるなら賭けてみたかった。だがそれにはアイテム以外にもまだ問題があった。

「へえー。じゃあすぐに鍛冶屋さんに持って行って精製してもらいましょうよ!」

「まだ無理なんだよ。」
「え?」

ナギが首を傾げる。

「なんでですか？」の

「その精製にはさ、かなり高度な鍛冶スキルを持った人じゃないと出来ないんだって。」

そう、それこそがもう一つの問題だった。

俺の知り合いには鍛冶屋は何人かはあるがこの精製が出来るほどレベルが高くない。全員、確認したがダメだった。

「とりあえずアイテムはある程度、確保したけどそれを作る人がいないんじゃないかな。どうしようもないよね。どうしたもんかね。」

「

とりあえずハンバーガーにかぶりつく。うん、うまい。咀嚼しながらとりあえず方法を考える。知り合いに当たって良い鍛冶屋を紹介してもらう、などありきたりなことしか思い浮かばない。

「ま、最悪買い換えるとす」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「ん、どうした？」

「も、もしかしたら私、その精製出来る人 知ってるかも
れません」

第一章 仲良きことは美しきかな 2（後書き）

最近、暇な時に登場キャラ達の顔を脳内で作って、落書きノートに書くのが趣味になりました。

もしかしたらキャラデザインがうpされる日も近いかもしれません。

では（p | .）

第一章 仲良きことは美しきかな 終（前書き）

ども、角材さんです（。・。）

いつも暇な時に内容想像してニヤニヤしてて、この前友達に叱られました（*ゝ*）

それではどぞノシ

第一章 仲良きことは美しきかな 終

ナギが放った言葉はソラを驚愕させた。ソラの中でこの剣を進化出来るほどレベルが高い人はそうそういないと踏んでいた。いるとしたならそれは鍛冶に命を捧げるほどの勢いで鍛錬した人のみだろうと思っていた。行くのなら早いほうが良い、ということになった。二人は皿に残された料理をいつもより少し早めに食べ、料金を払い店を出た。いつも歩いている二十六層の街を転移門に向けて歩き出す。

「その鍛冶屋とどこで知り合ったんだ？俺が言うことじゃないが、知らなかったぞ？」

「えーっと 前に、四十八層の迷宮区に行ったことあったの覚えてますか？」

「あ、うん。」

二人が四十八層に行ったのは八ヶ月近く前のことだった。その時は四十八層が最前線で、一応『攻略組』と呼ばれるものに所属している二人は迷宮区のマッピングの為に訪れていたのだ。

「迷宮区に行く前に主街区で買い物してたじゃないですか？あの時にソラさんが迷子になったの覚えてますか？」

「 何度も言うがなあ あれは俺が迷子になったんじゃないかって、お前が迷子になったんだよ！」

ソラが回復結晶などを買っている時にナギは至る所を歩き回っていた。そして気がつくとソラの後ろにいなかった。そしてソラがマップを確認してナギがいた場所の向かうと、そこにはもういなくて、ずっと離れた場所にいた。そのナギを追いかけて とうの

ひたすら続けていた。

そして数時間後、ようやく見つけた時にナギが俺に向かって発した言葉は

『あ、ソラさん。もうー、どこに言っただんですか？探しましたよ？』

このことから分かるようにナギは自覚はないが、極度の方向音痴だ。余談だが二年前のあの日も本当は、適当に歩いていたらあの村にたどり着き、悪漢に襲われたのだとか。

「それでソラさんを探してる時に偶然、会ったんです！それで話してみると、話が合って仲良くなりました。そしたら、自分は鍛冶屋やってるから良かったら整備してあげる、って言われて。たまに会いに行ったりしてたんですよ。本当は近いうちにソラさんにも紹介するつもりだったんでちょうど良かったです！」

「へえー。楽しみだな。」

そして店から出て、二十六層の転移門に来た二人。その時、急にナギに手を握られた。

「ど、どうした？」

ナギとは長い間コンビを組んでいるので大したことでは驚かないが、急にされると反応に困る。

ナギは手を転移門に掲げていた。

「転移、リンドース。」

ナギはソラの言葉が聞こえていなかったようで転移門に行き先を告げていた。

次の瞬間、何度転移しても慣れない転移特有の無重力の感覚に包まれる。

数秒後、転移が終わり、リンダースの街に着いていた。街にはいろいろな人と店がひしめいている。

「ここから少し離れてますから歩きましょう！」

「あ、うん、つていや、あの、ナギさん？」

ソラの声が小さいのか、はたまたナギが聞いていないのかわからないが手を繋いだまま歩き出した。

その鍛冶屋というのは主街区の端にあるらしく、手を解けないままナギに半ば引つ張られながら歩いていた。

街の人々の視線が痛い、気がする。多分、誰も何も言っていないはずなのに笑うような声が聞こえる、気がする。

するとナギは顔を真っ赤にしているソラを無視して、話を始めた。

「あ、先に言っておきますけど、鍛冶屋さんの主人って女の子ですからね？」

「えっ！？」

素直に驚いた。ぶっちゃけガチガチな筋肉質のオッサンをイメージしていた少年は転びそうになった。

「そろそろ見えるはずなんですけど あ、あれです！」

ナギが指を指した先には、大きな水車が回っている家があった。そこに慣れた感じで近づき、ドアを開けた。

カリーンと鈴の音がなり、扉が開いた。家の中には、机の上だけでなく壁いっぱいに剣が飾られていた。先の鈴の音で客が来たことに気づいたようでNPCの店員が来た。

「いらっしやいませ。リズベツト武器店へようこそ。御用はなんでしょう?」

「あ、店長に会いに來ただけなので大丈夫です。」

そう言い残し、奥にある暖簾のれんの掛かった場所に行こうとした。すると、その場所から誰かが出てきた。

出てきたのは薄赤色の髪をしたエプロンの少女だった。

「あれ?ナギじゃない。ひさしぶりね。」

「うん!ひさしぶりー、リズちゃん!」

エプロンの少女と笑顔で語り合うナギ。恐らく彼女がこの店主なのだろう。しばらくガールズトークが続きそうだったのでソラは店内にある剣を見ていた。

(すげーな なかなかランクの高いのもある)

と感心していると。

「あ、紹介遅れちゃったね?この人が私とコンビ組んでくれてる、ソラさん。」

急にソラに話題を振ってきた。いきなりで驚いたソラだったがどうにか言葉を発した。

「ど、どうも。いつもうちのナギがお世話になってます。あ、俺、

堅苦しいの嫌いだからタメ口でお願いな。よろしく、リズベツト。」
「あ、うん。ここで店長やつてるリズベツトといます。私のことはリズでかまわないから！こちらもよろしくね、ソラ。」

握手をして、挨拶を終えた二人の間には沈黙が訪れた。

するとリズベツトはもう堪えられないとばかりに質問をしてきた。

「あ、あのさ　すごい言いづらいんだけど　一つ質問していい？」

「？　どうしたの？」

さつきからリズベツトの視線が一点に集中していたことにソラは気づいていた。そしてこの後起きる事を考え、苦笑いをしていた。だが同時に悪戯心も芽生えていた。

「二人つて　その、付き合ってるの、かな？」
「へ？」

リズベツトの視線は未だに強く結ばれていたソラとナギの手を見ていた。

ナギの顔が一瞬にして茹でダコのように真っ赤に染まる。

「！！！！！！！！　こ、こここれは、その、ちちちちちち違うんだよ！！！！！！？深い訳が！！！！！！！！」

ここで黙っておけば良かったのに、悪戯心の芽生えたソラは口を挟んだ。

「転移するときに急に手を握られたんだ　人がたくさんいるのに大胆だよな　」

「そ、ソラさんは黙ってて……！こ、これには深い意味はななな無いだよよ！……？！？」

「じよあなんですつと握ってんのんだよ？」

「そ、それは気づかなかっただけで」

「そう！愛し合ってるからさ！」

「だからソラさんは黙ってて……！り、リズちゃん！この人とは付き合ってなんかないんだよ！？」

「H A H A H A H A、照れ隠しに殴るのは止してくれと何度も言ってるだろ、マイハニー」

「マイハニー　なんて初めて呼ばれましたよ！」

そんなコントを横から眺めているリズベットが何かを考えていた。

「　　こういうのなんて言うんだっけ　　えーと　あ、そうだ。夫婦漫才だ。」

第一章 仲良きことは美しきかな 終（後書き）

これで第一章が終わりました。

この調子じゃいつ完結するのやら

チマチマ更新していくんでよろしくです（＊、、（

では（＊・ω・）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1477y/>

ソードアートオンライン 始まりの大地

2011年12月1日12時48分発行